

幹細胞臨床研究を開始

厚労省から7月下旬に認可

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）は乳がんの部分切除などで欠損した乳房を、患者さん本人の幹細胞を用いて再建する臨床研究を8月に開始する。厚生労働省の「ヒト幹細胞を用いる臨床研究に関する指針」に基づくもので、同省から7月下旬に承認される見通し。民間病院では初となる。

民間病院では国内で初めて

幹細胞は、特定の細胞に変化したり、自らを複製したりする能力をもつ。iPS細胞（人工多能性幹細胞）と同様に、再生医療への応用に向け、さまざまな研究が進められている。

同院が厚労省に申請した研究は、「自己脂肪組織由来間葉系前駆細胞を

用いた乳癌術後変形に対する再建治療の検討」。

乳がんの術後に欠損した乳房を患者さん本人の脂肪幹細胞を利用して再建するというもので、対象は乳房温存術後1年以上経過したケース。

患者さんの腹部や大腿部などから脂肪を採取し、専用のシステムで幹細胞を抽出・濃縮して脂肪細胞とともに欠損した部位に注入する。脂肪だけを注入して整形する従前の方法より、治療効果や安



脂肪幹細胞+脂肪の注入後は、乳房の形がより自然に

全性が高いのが特徴だ。

同臨床研究の統括責任者を務める同院形成外科・美容外科の山下理絵部長は、「脂肪注入のみでは、脂肪が体内に吸収されて

しまし生着率（移植した細胞などが機能している割合）は3割程度。肉芽腫など固くなってしまいうケースも少なくありません」と指摘。

出し、血管再生を促す機能があるため、生着率は7〜8割で形態形成の自由度も高い。肉芽腫にもならず、何より患者さん自身の細胞を用いるので、炎症も少ないのです」とメリットを強調する。

さらに、同院では脂肪の吸引にともなう合併症のリスクにも配慮。

たとえば、脂肪を採取した際にその部位が固くなることに備え、専用のマッサージ機器などを配置、術後のケアを徹底して行う。

また、医師以外にも専門の検査技師や看護師を確保し、チームを編成。看護師のなかには、治療の適用など患者さんの相談を受けるなど、治療前後に患者さんにかかわる再生医療コンシェルジュ

も設けている。「乳房は女性にとつてとてもデリケートな部位。治療だけでなく術前後のケアもきちんと行うことで、合併症の防止はもちろん、患者さんの精神的負担も軽減できます」（山下部長）

同院は今年4月下旬、同臨床研究実施計画を厚労省に申請。5月27日に行われた第26回ヒト幹細胞臨床研究に関する審査委員会です承された。7月下旬の最終審査もクリアする見込みで、8月から研究を開始する。

幹細胞を用いた乳房再建の臨床研究は、昨年8月に鳥取大学医学部附属病院が国内で初めて承認を受けた。湘南鎌倉病院は全国で2番目、民間病院では初めてとなる。

同臨床研究の実施期間は2年間で対象症例数は5例。「乳房を気にして温泉などに行きたくても行けない患者さんが少なくありません。患者さんのQOL（生活の質）向

上につながる臨床研究であるため、しっかりと取り組んでいきます」と山下部長。研究終了後も臨床で実施していく意向を明かし、「医師の診察の前に、コンシェルジュによる無償相談も行うため、ちょっとした変形でも悩まずにご相談ください」と呼びかけている。



「QOL向上に貢献する臨床研究です」と山下部長